

大阪大学図書館報

Vol.28 No.1 Jun. 1994 (平成6年) 通巻114号

目次

- | | |
|----------------------|-----------|
| ○化学分野の文献・情報検索 | ○教官著作寄贈図書 |
| ○オックスフォード大学のボドリアン図書館 | ○会議・日誌 |
| ○お知らせ | ○アメリカ便り |

化学分野の文献・情報検索

小田 雅 司

この度、ケミカル・アブストラクツ(Che-mical Avstracts, CA)のCD-ROM版(但し、1987-1991年5年間のCollective Indexと抄録のみ)が附属図書館本館に導入され、5月から使用が開始された。日頃CAを利用している我々研究者にとって大変喜ばしい進展である。

CAはアメリカ化学会の一部門であるケミカル・アブストラクツ・サービス(CAS)が発行している週刊の抄録・索引誌で、化学の分野では最大の二次情報である。化学のみならず、高分子学、薬学などの化学関連分野やその他物質を扱う研究者にとって必須の情報源となっている。その創刊は1907年である。私が学生の頃の1960年代にはCAより古い歴史を持つ抄録誌としてドイツで発行されたChemisches Zentralblatt(CZ, 1855年創刊)があったが、CZは1969年に廃刊

になった。従って、CAは現在名実ともに国際的な二次情報誌である。

CAの発行は創刊以来約半世紀は年1巻であったが、抄録数の増加により、1962年(Vol. 56)から年2巻となり、現在第120巻が刊行されている。CAの抄録対象は世界の主要な学術雑誌を網羅しているが、もとよりその数には限度がある。CAの抄録対象になるかならないかはその雑誌の国際的評価に係わっている。いずれにしてもCAの抄録数の増加は化学分野の学術論文数の増加に対応している。1966年までの抄録数の増加は各巻のページ数の増加で明らかであるが、その数は一見しては分からない。グラフ資料によれば、1910年に約2万件、1950年代後半に年10万件を越えている。1967年(Vol. 66)からは抄録番号が付され抄録数が見て分かるようになり、この年の抄録数は24.3万で

ある。抄録数はさらに増加しつづけ、1983年には45.2万、昨年1993年には55.1万となっており、どこまで増加をたどるのであろうか。最近10年間の増加率は22%となる。この増加の要因としては、研究者数の増加と研究者一人当たりの論文数の増加の2つが考えられる。この10年間に世界の化学系研究者数が22%も増加したとは考えにくいことから、各研究者の論文数の増加が主に反映しているであろう。そうだとするとこの論文数の増加は近年の各種測定機器の発達による研究のスピード化・効率化・精密化に負うところが大きい。

求める文献・情報の検索のためにCAの各巻末には詳細な索引がある。この索引も発行以来、年とともに変化しており、現在では、著者名索引(Author Index)、化学物質索引(Chemical Substance Index)一般事項索引(General Subject Index)、分子式索引(Formula Index)、環系索引(Index of Ring Systems)、特許索引(Patent Index)などがある。これらの索引を適宜選んだり、組み合わせて検索していくが、ページ数も多く文字も小さいので結構疲れる。この検索を各巻に辿って行くとなると相当の労力となる。幸いCAには10巻分の巻末索引をまとめた累積索引(Collective Index)が刊行されている。最近では1年に2巻なので5年毎の累積索引である。膨大な抄録数からも推定できるようにこの累積索引も大変大きく、一つの索引としては世界最大のものとしてギネスブックに載っている。ちなみに、最近1987-1991年(第12期)の累積索引は前記各索引を合わせると114分冊となっており、これだけでもかなりの書架を占める。従って、この累積索引により検索時間の大幅な節約になったとはいえ、なお相当の時間を要する場面が多い。当然ながら各索引をいかに上手に使うアプローチするかが検索時間を大きく左右するので、縦横に使いこなすための修練が必要

である。特に初心者は解説書等で、その構成や使い方を学び、早いうちに実際の検索に慣れることが大切である。私なども半日を費やしても必要な文献・情報が見付けられなかった経験がある。このような時は無駄骨を折った感が残るが、一方、短時間での検索完了は一種爽快な気分を味わわせるものがあり、ひいては研究の効率化につながる。

このように情報量が膨大になると印刷体での検索は大変になる一途であり、その迅速化・省力化にはコンピュータ検索の導入が必要になってくる。CAは既にデータベース化されており、1980年よりCAS ONLINEとしてサービスが開始されている。その後サービス内容が拡張されてSTN Internationalというシステムになっている。加入して通信回線を接続すれば研究室のパソコンから情報検索ができて大変便利になった。オンラインでは化学構造式や化学物質のCAS登録番号(Registry No.)による検索も可能である。CAS登録システムには、1957年以降の文献から採録した1000万件以上の化学物質の化学構造と名称が収録されている。他にも数種のファイルがあり、いろいろな情報を得ることができる。また、人事選考などで候補者の業績を、選ぶ側で独自に調査するときもCAS ONLINEによる著者名索引での検索が有用である。ただ、ローマ字で同姓同名者がいると同時に検索されてくるので、所属機関名などで検索をさらに絞ったり、内容の選別や判断が必要である。我々日本人名でもこの同姓同名は少なくない。このようにオンライン検索により情報検索が画期的に容易になったが、この利用は有料である。大幅な大学割引制度があるとはいえ、現在のところ研究室での利用頻度には経済的な面からも限度がある。我々の研究室ではなお印刷体での検索もかなり行っている。

豊中キャンパスでは、CAの印刷体は現在、基礎工学部の協力を得て理学部でのみ契約購

入しており、全巻が揃っている。化学系学科が協力して、講座費を割いて契約を維持しているが、CAの抄録数の増加、冊子の大部化とともに、価格も上昇し、現在のような負担・維持がいつまで続けられるかおぼつかない状況である。また、製本冊子数も約2100冊になって理学部図書閲覧室のかなりの部分を占めるようになってきている。収容能力も物理的限界に近づいている。CAのような、情報が膨大で、利用価値、利用者数が大きく、高価な刊行物はもはや部局単位での維持は困難になってきており、大学全体で計画的に維持すべき時代になっている。重要な学術雑誌・データ集で、高価なため維持が困難となり購入していた部局が購入を中止したら、大学全体として購入が途絶えてしまった例が私の知る限りでも幾つかある。これはやはり、情報検索を困難にし、大学としての損失ともいえるだろう。

このような状況下で冒頭のCD-ROM版の導入が開始され、無料で利用できるようになったのは状況改善の大きな一歩である。この検索は印刷体での検索と同じ感覚で行うことが出来るようであるが、私自身は未だほとんど

利用していないので、どの程度便利になっているか的確には言いがたい。我々利用者から問題点のひとつとして次が考えられる。検索は研究実験に従事している大学院生が行う場合も多い。学生は実験と平行したり、合間を利用したり、あるいは夜間に検索している。理学部から昼間、図書館本館まで出かけて、CD-ROM版で検索するのと従来どおり近くにある印刷体で検索するのとではどちらが便利であろうか。システム上どの程度可能かどうか分からないが、利用者にとっての最善は、各研究室のパソコンからアプローチできることである。次善は、図書館本館から離れた建物の最低1カ所(例えば理学部図書室)のターミナルからアプローチできることである。今回の改善は私の感覚からは次次善と言えようか。ただ、検索結果をフロッピーディスクに落とし、NEC98などに開くことができることで、前期の不便さは若干緩和されるかもしれない。いずれにしても今回のCAのCD-ROM版導入は歓迎すべきことで、今後一層の充実と利用者の便への配慮を切に期待したい。

(おだ まさじ 理学部化学科教授)

本館で利用できるCD-ROMデータベース

Chemical Abstracts 12th Collective Index

Business Periodicals Index

学術雑誌総合目録

判例マスター

電子広辞苑

現代用語の基礎知識

利用時間 午前9:00~午後4:30

HIASK(朝日新聞データベース)

場所 附属図書館本館メイン・カウンター前

オックスフォード大学のボドリアン図書館

玉井 暲

昨年秋、在外研究の機会が与えられたのを利用して、イギリスのオックスフォード大学に1月余り滞在した。7年ぶりに見るこの大学町は、レストランにアメリカ系のファーストフードの店が増え、紅茶の専門店が潰れ、オーディオやファッション関係の店が様変わりしたといった、一般に人々の生活と結びついた面での新たな移り変わりに戸惑いを感じることがあったものの、2、3日滞在して、受け入れ先のコレッジや、英文学部の図書館、

つも、そこには何となくやすらぎに似たものがあった。それは、着慣れた服をしばらく間を置いて着たときの感覚のようだとと言えるかもしれない。

こうした想いにとりわけ捕らわれたのは、ボドリアン図書館の中にいる時であった。私が最初にオックスフォードで研究生活を送ったのは、1985年から翌年にかけてであったが、この1年余りの期間中、ボドリアン図書館で得た様々な経験には特別思い出深いもの



ボドリアン図書館オールド・ライブラリー正面

大学図書館等に入出入りしていると、研究生活の面では以前のままたちを悠然と残していることにいつの間にかなつかしさを覚え始めていた。かつては、非効率、体系性の欠如、複雑すぎる習慣、旧態依然などと評してみたくなる面に苛立ちを覚えたものだが、この度、その状況に再度身を置いてみると、なすすべもなく自分がこの世間の流行・変化に無縁な世界の箱のようなものの中にすっぽりとはまり込むのを感じて、どこかおかしさを覚えつ

がある。以下、二度の経験をもとに、ボドリアン図書館の様子を紹介してみよう。

オックスフォード大学に在籍する者は、普通、3つの図書館を経験する。自分の所属するコレッジの図書館、専攻の学部・学科の図書館、大学図書館のボドリアンである。私は、英文学を専攻しているので、当然英文学部の図書館も利用する。ここは主として開架式で、館外貸出が認められているが、そのためには、まず大学の中央図書館であるボドリアンで登

録をして閲覧チケットを発行してもらわねばならない。このチケットはボドリアンに入館する時にはその都度提示を求められるから、オックスフォードで研究に従事する者には必須のものである。

ボドリアン図書館は、旧来のものに手を加えて再建築し、1602年開館にこぎつけたサー・トマス・ボドリーに因んで名が付けられた。ロンドンに大英図書館が開設されるまでの150年間はイギリスにおける文字通りの中央図書館であった。そのこともあって、ボドリアンは館外貸出のできない、調べものをするための図書館である。オックスフォード大学のメンバーのみならず、世界の研究者のためにも開かれている。現在の蔵書総数、およそ560万冊。イギリス国内で出版された本はここに納本が義務づけられているから、保管スペースに頭を悩ませるほど今も蔵書が増え続けている。名実ともに堂々たる世界有数の図書館である。

まずは閲覧チケットの申込み。アドミッションズ・オフィスに行き、手続きを行う。身分を証明する何らかの書類が必要だ。オックスフォード大学関係者からの証明書があればそれに勝るものはない。私は、今回も、所属するコレッジの学寮長に手紙を書いてもらっていたが、以前の登録記録が残っていたうえに、Japanese Friends of the Bodleianの会員カードも持参していたので、手続きは極めてスムーズに進み、部屋に備え付けられていた5分間写真機でとった写真をチケットに貼りつけて、すべて終わった。ちなみに、Japanese Friends of the Bodleianとは、ボドリアン図書館に好意的な関心をもっている研究者・人々からなる団体で、日本事務局は英国大使館内にある。希望者の入会手続きは難しくない。

チケットを最初に発行してもらう時は、他にいささか緊張を伴う儀式がある。たとえば本を大切に扱いますといった主旨のことを書

いた宣誓書の朗読が義務づけられているのだ。かつて私は、その場に臨んで、ガウンを着用したライブラリアンから、日本語版の宣誓書もありますよとの申し出を受けたが、自分は英文学を学びに来ているのですからと断って、いくらか気負い気味に英文版で宣誓したのを思い出す。無事手続きが終わり、このライブラリアンとしばらく雑談していると、どうしたことか、日本語版の文章に変なところがないかチェックしてくれないかと手渡された。すでにこの日本語版で宣誓した人も少なくならしく、手の指の当たる部分が黒ずんでいる。気になる表現もあったが、かつてこの場に臨んだ先輩諸兄姉のことを想うと、訂正したりするのはなんだか不遜のように思えてきて、だいたい良いのではないかと行って、そのまま返した。今回、この宣誓の義務は免除されたので、宣誓文がどうなっているのか知らない。いま、あの日本語はどう直っているのだろうか。

ボドリアン図書館の中樞は、オールド・ライブラリー、ニュー・ライブラリー、ラドクリフ・カメラの3つの建物からなっている。オールド・ライブラリーの入り口で守衛にチケットを見せて入館する。カバンの類は持ち込めるが、出るときにチェックされる。めざす部屋は2階の総合カタログ・ルーム。ボドリアンの蔵書は、閲覧室の一部の書物、辞書・参考書、雑誌類を除けば、大部分書庫に収められていて、一般利用者は近づけない。まずこの部屋で、閲覧希望図書について、書架記号をはじめ、いくつかの必要事項を調べたうえで申し込むのである。この時頼りとすべきは総合カタログである。このカタログは、4つに分かれている。1920年以前、1920年以降、1987-88年のそれぞれの出版物についてカタログと、1988年9月以降の出版物についてのオン・ライン・カタログである。このことは、目当ての本を探すのに1度の検索で済みますことが難しくなっていることを物語っ

ている。もっとも、現在どこの図書館でも程度の差こそあれ直面している問題であろうが。

カタログのコンピューター化が着手され始めて、それとは裏腹に興味深く思い出されるのは、旧来のカタログに残っている手仕事のなみである。私は、この膨大な巻数からなるカタログがAの巻からアルファベット順に並んでいる光景に圧倒されて、蔵書数の多さをいやがうえにも思い知らされたが、それにも劣らず、他にはない特徴に驚かされた。各巻の各ページが、B4サイズほどの厚めで丈夫な良質の台紙に、図書カード（サイズは日本の図書館で使っている目録カードを一まわり小さくしたくらいか）を直接糊で貼りつけただけで出来上がっているのだ。何とも素朴なカタログではないか。このカタログは、著者とタイトルのどちらからでも検索できる。そこで、ページを繰ってみてみると、利用者が気づいたのだろうか、カードの誤記、誤植を訂正した書き込みが見られる。19世紀以前の古い本については、美しい書体の手書きのカードが見つかったり、新しく改められたカードが古いものを剥がしたところに貼られていたりする。本の紛失が確認されたのだろう、該当カードを剥がしたスペースが平気で残されている。こう見てくると、利用者とライブラリアンが長年にわたり協力してこのカタログを作り上げてきた跡があちこちで窺われる。そして、このおおらかな作りの、一見素朴と見えるカタログは、私の経験の尺度に合っていたのか、意外に使いやすく、合理的とさえ思えたことを告白しておきたい。

カタログで調べた書架記号等を所定の用紙に記入して申し込むと、ライブラリアンがこちらの希望する閲覧室のカウンターまで本を届けてくれる。ただ問題は、希望図書が出てくるまでに時間がかかり過ぎることである。利用者向けのパンフレットには2、3時間の待ち時間と記されているが、半日ないしは1日覚悟しておいたほうがよい。私は、知人の

日本人ライブラリアンの特別な計らいで、ボドリアンの蔵書のほとんどが収められているニュー・ライブラリーの中で、請求された図書がオールド・ライブラリーやラドクリフ・カメラの閲覧室に運ばれていく現場を見学させてもらったことがあるが、そのたっぴり詰まった書庫の様子を見ると自分の希望した本にありつけるのに時間がかかるのも、ある程度納得できた。ニュー・ライブラリーとオールド・ライブラリーのあいだを地下連絡道が走り、その横には図書を速やかに移動させるためのダクトが架設されているが、それでも満足には応じきれないのだろう。

3階のアップパー・リーディング・ルームは、私がよく利用した閲覧室だが、主に英文と歴史の専攻者のためのものである。カウンターでは請求した本を受取り、退館のときに用済みの本を返却する。ただし、まだ必要な本は一定期間保管してくれるという、便利なシステムがある。開館時間は、月曜から金曜までは朝の9時から夜の10時まで、たっぴりある（土曜は午前中のみ）。夕食を自分のコレッジか近くのパブで済ませ、もう一度戻ってきて頑張っている学生も少なくないし、知り合いの先生が調べ物に夢中になっているのを目撃したこともたびたびある。これらの学生や先生の姿に励まされて、私はこの部屋で最も多くの時間を過ごした。疲れて窓の外を見ると、ラドクリフ・カメラの端正な丸屋根が目の前にそびえ、天気の良い日にはその向こうに青空が広がっている。この風景を眺めると時間の経つのも忘れてしまう。この部屋には、確かにここにいると、何もしないのに、研究した気分させてくれる危険なところがあるのだ。しかし無為のなかであれここで味わった時の流れは、私には紛れのないリアリティーを伴った黄金の時であったことに間違いはないのである。

（たまい あきら 文学部英文学講座助教授）

■■■■■ お知らせ ■■■■■

「平成5年度図書館年次報告書：付自己点検評価報告書」の刊行

このたび附属図書館は、平成5年度年次報告書と自己評価報告書を合冊して刊行した。年次報告書は、大阪大学附属図書館の過去と1年間の活動状況を把握し、課題を掲げ、今後の方向をあきらかにすることを目的として、平成3年度から刊行している。また、自己点検評価報告書は、平成4年度に発足した附属図書自己評価委員会の報告書であり、情報化、電子化時代という大きな環境変化の時代に対応して、今後の図書館の在り方、活動、課題等について単年度の記述には入らない短期的あるいは中期的視野からの展望を含んでいる。

このようなことから、今回はこの自己評価報告書をそのまま年次報告書の後半部として一冊にまとめたものである。



本館における土曜開館の実施状況について

本館では本年4月から、利用者の学習・教育・研究の便宜をはかるため土曜開館を実施した。開館時間は12時から17時まで、サービス内容は、館内閲覧（開架図書室と書庫棟）のみである。また、夏期などの授業休業期間は休館となる。

これまでの土曜日の利用状況（利用者の身分ごとの入館者数）は下記の表の通り。開館

当初は利用者へのPR不足もあって入館者数はあまり多くなかったが、5月以降は200人を越えた。特に7月にはいってからは400人を越えている。これは、今年から共通教育の機構改革により夏期休業期間が短縮されたことも影響していると思われる。今後は、検索などサービス内容の向上をはかっていきたいと考えている。

年 月 日	教官・職員	大学院生	学 生	学外者その他	合 計
1994. 4. 16	2	6	50	13	71
4. 23	1	11	117	0	126
4. 30	5	17	60	6	88
5. 7	2	23	167	4	196
5. 14	1	16	169	14	200
5. 21	5	34	196	11	246
5. 28	4	21	181	13	219
6. 4	7	24	170	2	203
6. 11	9	35	207	18	269
6. 18	6	16	186	19	227
6. 25	4	19	189	16	228
7. 2	4	23	379	20	426
7. 9	10	46	399	15	470
合 計	60	291	2,470	151	2,972

教官著作寄贈図書

一本館

- 吉野 勝美 (工・教授)
 液晶とディスプレイ応用の基礎
 吉野勝美他著 (コロナ社 1994)
- 分子とエレクトロニクス
 吉野勝美著 (産業図書 1991)
- 自然・人間・放言・備忘録
 吉野勝美著 (信山社 1992)
- 雑学・雑談・独り言
 吉野勝美著 (信山社 1992)
- 雑音・雑念・雑言録
 吉野勝美著 (信山社 1993)
- 中村 敏枝 (人・助教授)
 感性情報処理
 中村敏枝他著 (オーム社 1994)
- 後藤 昭雄 (文・助教授)
 諸本集成 仲文章注解／幼学の会編
 後藤昭雄他著 (勉誠社 1993)
- 森安 孝夫 (文・助教授)
 ウィグル文契約文書集成 1-3
 山田信夫著 (大阪大学出版会 1993)
- 福岡 秀和 (基礎工・教授)
 音弾性の基礎と応用
 福岡秀和他著 (オーム社 1993)
- 山本 佳樹 (言文・講師)
 幻想のディスクール
 山本佳樹他著 (鳥影社 1994)
- 紙野 桂人 (工・教授)
 都市の文化
 紙野桂人他著 (都市文化社 1994)
- 久貴 忠彦 (法・教授)
 新・判例コンメンタール民法 11-13
 久貴忠彦他編 (三省堂 1994)
- 井上 薫 (教・名誉教授)
 大阪の歴史と文化
 井上薫編 (和泉書院 1994)

生命科学分館

- 杉本 侃 (医・教授)
 図解外傷治療ガイド
 杉本侃編 (文光堂 1994)
- 土谷 裕彦 (歯・教授)
 新保存修復学
 土谷裕彦他編 (クインテッセンス出版 1994)
- 吹田分館
- 山本 雅彦 (工・教授)
 Field Emission '93 : Proc. 40th Internat.
 Field Emission Symp. Nagoya 1993
 ed. by Masahiko Yamamoto et al.
 (North-Holland 1994)
- 櫻井 良文 (基礎工・名誉教授)
 Current topics in amorphous materials
 : physics & technology
 ed. Yoshifumi Sakurai et al.
 (North-Holland 1993)
- 仲町 英治 (工・助教授)
 ヴァーチャル・ファクトリー 未来工場への挑戦
 仲町英治 (工業調査会 1994)
- 吉野 勝美 (工・教授)
 液晶とディスプレイ応用の基礎
 吉野勝美他著 (コロナ社 1994)
- 分子とエレクトロニクス
 吉野勝美著 (産業図書 1991)
- 雑音・雑念・雑言録
 吉野勝美 (信山社 1993)
- 村田 雅人 (工・助教授)
 弾・塑性材料の力学入門
 村田雅人著 (日刊工業新聞社 1993)
- 岡田 博美 (工・助教授)
 情報ネットワーク
 岡田博美著 (培風館 1994)

—基礎工学部図書室—

福岡 秀和 (基礎工・教授)

音弾性の基礎と応用

福岡秀和著 (オーム社 1993)

—理学部図書室—

池谷 元伺 (理・教授)

New applications of electron spin resonance dating, dosimetry and microscopy by Motoji Ikeya

(World Scientific 1993)

■■■■■ 会 議 ■■■■■

豊中地区運営委員会

6. 3. 2 (水) 15:05~15:30 (本館会議室)

1. 継続審議となっていた豊中地区運営委員会規程の改正について審議した結果、原案どおり承認された。
2. 継続審議となっていた豊中地区図書選定小委員会設置要項の改正について審議した結果、原案どおり承認された。
3. 本館の土曜開館の実施に伴う利用内規等の改正について審議し、原案どおり承認された。
4. 次期豊中地区運営委員会委員長の選考を行い、理学部小川英行委員が選出された。

分館長会議

6. 3. 10 (木) 10:00~11:30 (本館会議室)

1. 平成6年度事業費予算要求案について審議した。
2. 平成7年度新規概算要求事項案について審議した。

図書館委員会

6. 3. 28 (月) 10:03~10:55 (本館会議室)

1. 平成6年度事業費予算要求案について審議し、原案どおり承認された。
2. 平成7年度新規概算要求事項案について審議し、原案どおり承認された。

生命科学分館運営委員会

6. 3. 22 (火) 15:30~16:30 (生命科学分館会議室)

1. 生命科学分館資料費部局分担比率について、平成6年度分については原案どおり承認された。平成7年度以降については別にワーキンググループを結成し検討していくこととなった。
2. 生命科学分館規程等の改正について協議し、原案どおり承認された。

■■■■■ 日 誌 ■■■■■

- | | | |
|-------------|--|------------|
| 6. 3. 2 | 豊中地区運営委員会 | (本館) |
| 6. 3. 8 | 学術情報センター総合目録小委員会 | (学術情報センター) |
| 6. 3. 10 | 分館長会議 | (本館) |
| 6. 3. 15 | 学術情報センター総合目録委員会 | (学術情報センター) |
| 6. 3. 22 | 生命科学分館運営委員会 | (生命科学分館) |
| 6. 3. 25 | 職員研修講演会 | (生命科学分館) |
| 6. 3. 28 | 図書館委員会 | (本館) |
| 6. 4. 13~15 | 新入生図書館利用オリエンテーション | (本館) |
| 6. 4. 16 | 本館の土曜開館開始 | |
| 6. 4. 25 | 近畿地区国立大学図書館協議会 | (京都大学) |
| 6. 4. 25 | 近畿地区国公立大学図書館協議会企画委員会 | (京都大学) |
| 6. 5. 2 | いちょう祭展示 | (本館) |
| 6. 5. 25~27 | 日本医学図書館協会総会 | (東京都) |
| 6. 5. 31 | 国立大学附属図書館事務部課長会議 | (東京医科歯科大学) |
| 6. 6. 1 | 国立大学図書館協議会文献複写に係る著作権問題特別委員会、図書館情報システム特別委員会、国立大学図書館協議会賞受賞者選考委員会、常務理事会 | (東京大学) |
| 6. 6. 2 | 国立大学図書館協議会理事会 | (東京大学) |
| 6. 6. 10 | 近畿地区国立大学図書館協議会総会 | (大阪教育大学) |
| 6. 6. 13 | 日本医学図書館協会理事会 | (東邦大学) |
| 6. 6. 22 | 国立大学図書館協議会準備理事会 | (伊豆長岡) |
| 6. 6. 23~24 | 国立大学図書館協議会総会 | (伊豆長岡) |

アメリカ便り

(図書館にシアトルから電子メールがはいりました。同僚の山崎隆史さんからで、彼はワシントン大学の東アジア図書館に留学中です。おもしろい話だったので紹介します)

外国に行かなければわかりにくいことの1つは日本が「外」からどのように見えているか、あるいは見えていないか、ということでしょう。

アメリカにいて一番よく見える日本は、車や電気製品といった「もの」の形をとっています。次に、ビジネスマンや旅行者といった「人」の形での日本も、日常的に目にすることができます。そして、一番見えにくいのは、「情報」としての日本だということが、実際です。

情報の窓口として大きな役割を果たすはずの日本の図書館は、アメリカからどのように見えているか、それはやはり気になる問題です。

今、アメリカの図書館・情報サービスは、大きな変換期をむかえています。図書館の機械化につぐ「第2の革命」と呼ぶ人もいます。それは図書館の業務やサービスだけでなく、基本的な存在形態そのものを変えてしまうポテンシャルを持った、インパクトの大きさにおいて機械化革命をはるかに上回るかもしれない変動です。

それは、「図書館の全面的なネットワーク化」というべきものです。アメリカでは、国家的事業としての NREN (National Re-

search and Education Network) への期待が高まり、図書館の事業やサービスにとどまらず「図書館の存在そのもの」を、ネットワーク内に仮想的に構築してしまうという方向性が論議されています。そして、インターネットは日常的な業務の手段となっています。

アメリカにいと、インターネットに代表される世界的なネットワークが、図書館・情報サービスの軸になりつつあることが実感できます。あらゆる情報がネットワークに集積されつつあります。逆にいえば、ネットワークから「見えない」情報は、地球規模の情報流通から取り残された存在になりかけているということでもあるのです。

ここで話は最初に戻るわけですが、問題は日本です。

インターネットの中で、日本の図書館はどの程度に「見えて」いるかとなると、アメリカからアクセスできる情報の量を考えた時、今の時点ではその可視性がまだ低いことを認めざるを得ません。徐々にインターネットへの窓口は増えていますが。

ネットワークに関してアメリカより10年遅れているといわれる日本が、これからその差を埋める方向に動き出すことは、確かだと思います。その動きの中で、日本の図書館はどれだけのペースで、どの程度まで、「世界から見える」存在になっていくのでしょうか。

そして大阪大学の図書館は？

(やまさき たかし 附属図書館情報管理課
洋書目録情報掛長)